奇說排悶録 前編

三

特別
へ21
2460
3

尾定

奇説排門録巻之三

貞烈之部

目録

黄善聰
倪氏
嚴貞烈
張貞女
許烈婦
二烈
張烈婦

排門録巻之三

21
2460
巻12-3

鄭氏
嶽賈妻妾
林氏
金三妻
汪來姐
秀水賊犯女
劉盼春
高三
許氏鶴
鷄

合十七種

奇説排門録巻之三

貞烈之部

黄善聰

六樹園翁　譯

黄氏の女善聰と云へる女あり。金陵地名の淮清橋の住けり。年十二の時母を失ひぬ。姉の已の人の嫁しゝ。父香を販く業とせり。善聰幼しく依り頼む所無き孤憐そく。男子の装へせ携へて盧鳳地名の間を遊ぐ。数年ありて父死しぬ。善聰姓名を張勝と更て父の業を継ぐ。茲の李英と云者あり。此も香を販る人ゆく。金陵に来りしが。伴侶と為て寝食をも共のせり。さて共年を喻まど女なるを知らざりき。後の李英と階の金陵の返りて。其妹の家を訪

けるゆゑ。姉も初めハ妹なるを知らざ。其故を聞く怒て詈り曰。男女同伴さる道理やある。汝来て辱を我に及ぼすや。と云く拒納まざ。善聰死を以て誓ひ云く。厚事をせざ。と云其時鄰なる嫗を呼て云く。汝察せ〜むるゆゑ果〜く虚子にぞみる。姉始て妹が辛苦せ〜る後悟て相抱て哭く。さて善聰装を改めて女の服を着け。翌日李英入来て同く往ん夏を約せんとする時。女ちら〜成角て大に敬篤死ぬ。李英母に告て善聰と婚を為んと求むるぞ。善聰従へざ〜て曰。若李英に嫁〜ぞ是やぐ密に逃ひるのちさらんと。人の疑を生ぜ〜。と云鄰里の者さまぐ動るを堅く辞て従ふ夏あ〜。官府に是を聞て其聘禮を助け玉ひ命ぜ〜まて夫婦とす〜玉ひ〜る。此夏明史の列女傳にも載て著きるゆゑ。

倪氏

歸安地名の倪氏ハ陳敏ハと云者に聘を受て嫁せざ〜時陳軍に従ひ行て返て来ず。人誤を傳て陳死せりと云る。倪氏失て嫁せざ。五十年を過て陳帰て来て始て婚姻をぞ。久に女時に年六十一なり。夫の年六十八なり。夫婦とも霜雪頭に盈る。時の人此を白頭花燭と歸りぞ。

嚴貞烈

嚴氏ハ宿遷地名の人なり。父某孝四鄰郷の名に住て農と成て業と

此虚河邊なるべし時く水の災あり。家貧くして煙をたてず兼々

嚴氏いとけなき并せざるども（女子十五已前は并せざる）父嚴氏を李文波と云者の家

の遺ゝ。李文波は金墉市（名）の市の賈人の子なり。幼き時父母の遺

る。兄嫂が家の養はるゝ居たり。嚴氏ある事なる支勇姑の如く

進退皆禮を以てせり。食物のあらくなり織縫の業やゝ為さ

るるのみ。丙子の年文波病て臥居なりの。兄嫂嚴氏の屬しく

ゝ。ひとすがら看病せりと云へば。嚴氏唯々と答ふ。藥餌を煎じ起居を

扶けるなど。只一人にて勤む。夕べは衣襟を整へ帶をゝ解き寢ず

文波病重くして遂に死ぬ。嚴氏血の泪を出して泣て食せざる

ること。誓て穴を同くして死せんと云ふ。父及兄嫂勸慰めて

家に還らしむ。嚴氏曰兒は李氏の婦なり。何ぞ父母の家に帰らん

と。遂に死なんとする心彌決せり。兄嫂日く来りて衛り居たり。嚴

氏製する所の衿。枕。帨。履。簪。珥等の物を丸出して南北の隣家の子

女に與へて日此らの物は吾が用ひる所なれば汝に貽るなり。我は他日新き衣

製せんと云ふ。奴婢飲食なども平常の如くなれば兼て死なんと云し

心少し弛みたり。と皆く喜ぶ。其後守り者も少し忘れ

半時なれば傍を離れ居たり。間に嚴氏已に環を梁に投じて縊死

せり。其時觀者相聚る支堵垣の如く人の如くなり。此を哀まざる者なし。

其戸を塞るに李文波と穴を同くして葬りたり。

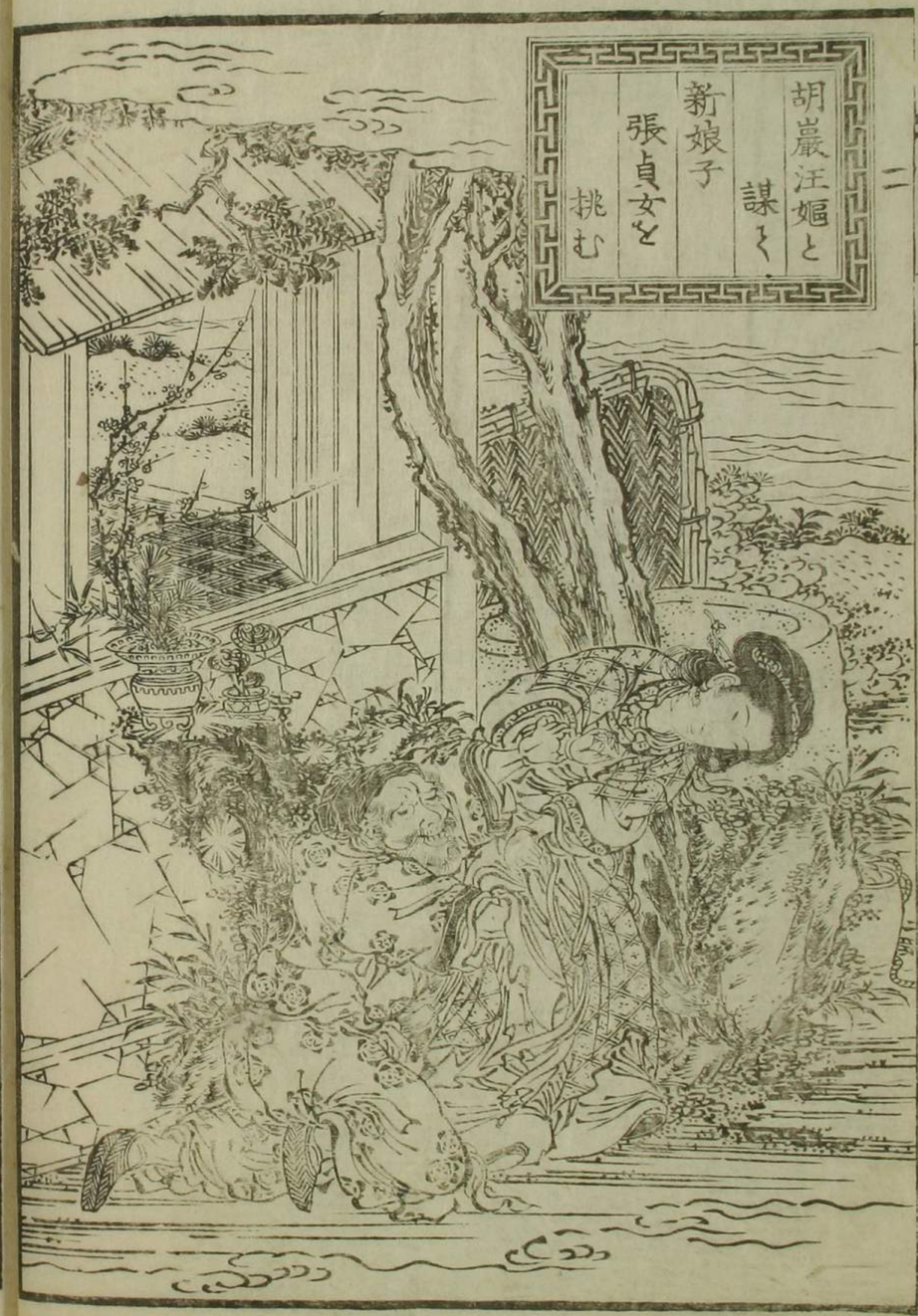
張貞女

張貞女が父の名は張燿といつて。嘉定曹巷（嘉定は地の名も曹巷は小名）の人なり。貞女汪客が子を嫁せり。客は嘉興地の人なり。僑ゐ安亭地名に住る。其妻汪嫗（汪氏の老いたる者）好者にして人と私事のごとし。汪客老て酒残のこり嗜て日々醉臥て何るのをも省ず。諸惡少携て嫗が家に来て酒を飲む。客が子の婦を娶る時惡少皆室の内に在て。果殽を並べて歡宴をなす。嫗婦を挈て出て惡少を拜せしむるに貞女拜せず。漸日比を過して姑が為を所をえて。夫に語て曰某々と云者は何人ぞや。夫が曰是吾父の好友にして。通家の往来久き人なり。貞女曰。好友そも何事をなるぞ。汝長大にして汝が母斯の如きを。恥ざるのならずやと云なり。一日嫗惡少と同く浴をとて。婦を呼て湯を持来れと云へ。

貞女湯を提て至れば男浴室に居り。驚走て。遂に母の家に帰り。哭すること数日なり。人其故を知者なし。其母強て問へども漸あらく寔を告ぐ。斯て居る事久しくして。嫗が方より偽て。好言のごとく貞女に侘て。貞女再至れるに。嫗悪言を以て凌辱む。貞女時に泣て其夫に語て。諸惡少を謝して交を止め玉へと云て。又間を伺て従容に客を勧て。男も又ヨワく酒を飲玉へと云へ共。客父子愚にして終に省ず。反て婦が云ことく嫗に告げ。嫗怒て婦を笞に至れり。此家に来る惡少の中胡巖と云者最桀黠なり。群黨皆あり。親と崇めて。下て其指使に従ふ。一日胡巖惡少等に向て曰。汪嫗老て此に来る。唯財を利として。且多

く酒を飲むなり。新娘子誠に美なり。吾已に其姑と共に寝ぬ今其婦の室に寝んとて他処に出る共天に迎上る事能へじと云て入て媼に語りて云。新婦人を厭ひて人の意に叶はず若胡郎と共に寝るべ。一家に在りて吾等快意楽を行はん且之を碍言者あらじと云へむ。媼承引て然るべしと云ふ其子の縣へ出る義元て。媼貞女に命じて兄を繊らせて。已が私せる奴に遺らんとて貞女吾豈奴の為に繊らんやと云媼益々怒る。悪む胡巖等四人樓に登りて縱に酒を飲て貞女を呼て登て同く飲やうと云ふ。貞女機室に居て答へず胡巖後に来て金梭を奪ふ貞女詈りて且泣て乞ふ。胡巖梭を還じ與へ貞女梭を折て地に擲つ。媼已が梭を以て與へるに又梭を

折て機を罷て出ぬ頃あり媼浴するに。胡巖も来て共に浴を浴じ畢て媼が曰今日新婦が室に宿せんと云胡巖入て貞女を犯さんとするに貞女大に呼て人を殺すと云て杵を以て胡巖を擊つ胡巖怒て走て出ぬ貞女房に入て自仆て地に臥て泣く其声一夜絶ず明日に成て息絶るが暮に至りて漸く蘇ぬ。さて歸位とくどく死せんとて巖と媼と事の泄んるを恐て貞女を床足に繋ぎて守て居て。明日諸悪少を召て酣飲し。二鼓の比貞女を縛め鐵錐を以て擊つ貞女編苦堪ずして何ぞ刃を以て速に殺さで徒に呼ぶ一人前んで其頭を刺し一人其脇を刺し又其喉を刺て遂に殺し畢て共に尸を焚て之を焚んと欲するに尸重くして挙べからず


二
胡巖汪嫗と謀る
新娘子張貞女を挑む

其時火を縦く其室を焚く。鄰里の者火を救ふんとて入来て貞女ゞ尸を覓て。驚て死人ありと呼ぶ。諸悪少皆逃行る。中の一人私の曰我鐵錐を以て婦を刺る。數四せゝ死せざるを死人の死ゝ難ども斯の如ゝと云ふ。貞女死せる時年十九の。明の嘉靖二十三年五月十六日なり。官小女奴及諸悪少を召て鞫さるる時。女奴悪少を指さゝて曰是某と云者吾姊を縛り。此某推を以て撃てり。某刃を以て刺せりと云へ。嫗悪少を罵て曰。吾汝等の負ざるの汝ら姑ゞ婦を殺さへ沿のあらざると云て吾を欺くか。然るの今斯なるこゝ何如と云て腹こそり嫗つの悪少等の尋ぐ獄の死ゝけり。貞女生まつる貌よく姑の奉て甚謹めて呵責の敢て少も怨る言葉云へど姑ゞ悪を為の及て。獨九然として白刃を暗て惴ざるの。賢ならざるんや。此嘉定縣村名の故列婦祠あり。貞女死せざる前三日祠の旁の人皆空中鼓樂の声あり。又祠中の火炎と。柱中なり。是正く貞女死ゝて神となる貌の徴なり。と人云へり。

許烈婦

烈婦許氏の名を長姑といひ。東流書邨地名の人なり。父の正初と云て農人なり。長姑初て生ずるや大義の通じ。言葉を程よくせり。年十八の。城西地名なる汪氏の婦ゝて。吧豪歐陽建と云者素より其姑と通じ居り。長姑を引て姑の如く私通ぜを

想ふ。數月公の掛ふとしげさるを折も至りなる。ある夕暮姑豪戎
床の寝所の至るの下の匿を。豪長姑ぐ合せる戎伺ひ。衣を解れ出でず捜く。長
姑声を擧て跳び拒てるるべ。豪惧まて逃まを去るるり。長姑乃衣襟
を整。天地を拜して誓て死せんと云へ。或勸慰むまども聞ぐ。
其夜長姑自室の中の縊まて死せり。康熙四十八年七月五日なり。此
支官の訟なるの。邊吧の寧。他の一時の。例して旁吧の請て
代て驗せむ。建德裘公と云人至まり。此時早六日を過して。臭
を辟ぐん為の驗者。先ごて香を焚て俟つ。裘公至まべ異香空中
に起て。其香檀麝の如く。漸街衢の間の達まり。長姑ぐ顏色
生るぐ如く。衣履て整へり。裘公驚て拱みして。縊痕を驗て命

じて。安の動まるのなるまと。と戒めて嘆じて帰り王へり。其翁八吧留
なりけまべ。唯内済のして其事をえ紀まるり。久くして烈婦戎
郊北地名の殯せりとなん。十餘年の後の至りて汪荆門と云人。委此事を
聞て。あるるの。乾隆年号丁丑の年。吧寧蒋公吧志を編る時。北城の
公署の事を同まる者の命じて。各の之る所を書して吧志の入まん
とする時。汪荆門先長姑ぐ戎入まべ。目を書して壁の粘置
けるぐ。歳暮のなりて同舘者と偕の帰らんとて。此時長姑ぐ事いまぐ筆
を採らど。夕べの餞を舘中の設て。相聚て酒飲居るの忽異香薫て
臭を撲て。座の老なる書生あり。親く長姑ぐ死せるをこんろして者なり
けり。その人の日。當年許長姑ぐ死せる後。香氣斯の如し。是其魂魄此の

来るべしと云へ言いやぐ畢らざるに大風起りて一つの紙をひるがへして席上に落しぬ。見れば長姑が我題目しるす。書て粘て置る筵なりけり。空中の人皆怖れる。汪荊門安くて燭を秉て立どろに長姑が傳を書て邑志の中に入れ別れてぞ帰る。

二烈

烈婦は盧氏なり。夫は李祐と云て。如皐地名の閭師。酉年に役を避て四方に行て営なし。僕が虞国名の産なる故便りに思虞に来りて金泛と云へ所に住むとて。酒を四隣の者に進めて。周進貴と云者の方へ人を遣らざりけり。周進貴心中に怒てぞ居る。又此所に豪の張島と云者李兵憲が寵を恃て。者民下知なると為て海上に虐威を振へり。周進貴は張島が義兒なり。周進貴。祐が妻の艶に心を寄て衣を庭に曝し居るを。紈綺のヨロヒを覗て。張島がのゝ性を説て曰。里中に容盗あり。如皐地名より来て。藏物ヨロヒて且婦女艶なりと告げ。張島喜て凡牙と頼む。周洋と云者と謀て。嬢を統て李祐が家眷を捕へ其家財を籍て。家人悉縛られ。周洋が別室に繋がれて苦うしたりけり。寃なりと號ぶ声。天に響てなりけり。列婦及女を。周洋が寢所に入れ置て。周洋をしきりに諷して曰。汝が夫の生死は吾黨の手の内に在。吾黨の言所に従へ。生を乞し。然らずんば且暮獄中に死せん。母と女と何に逃れ往んやと云へ。烈婦聞て泣て。私に女と計て曰。父は烈士なり。何ぞ我姿を以て禍を買べんや。我暴婦なりと。いそぎ数ヨロの兇を抗んや。早く

自裁をす。汝が父も謝せんや如し。然らば父も囚を解きのがせん。と云へば
女も然りと答へぬ。盧氏廁に往く庖刀あり。窃に取りて錮所に
還る。夜に入りて守る者の睡るを伺ひて。女に命じて自害をさせ
る。候の声おごそかと響けば守者目を覚せり。盧氏給て厠に
声ぞと云へ。暫程を過して同く自刎せり。體戦て物音しぬべし。
守者躍起て燭を取て入れば。両人の尸血に染て有り。潛に張島に
告ぐ。周洋秘して李祐に知らしめず。亟に二人が尸を舁せて。松香黄椒
を雑へ人をやく叢望の中に焚せり。枚李祐を械して引立行く。
婁を過て兵憲が至りぬるに。贓物を依て兵憲に受ざる
なり。張島周洋と計りて曰。其妻女を燼て李祐を放遣らば禍を遺

とのみ。此を江に沈めば禍の根を断つ。と云て繫て江に投入れり。蒼頭に
て命助りて道を去れり。後に烈婦が父老儒江を渡て女の行方
を尋ねぬ。踪跡無ければいたく哭てぞ帰りぬる。張島烈婦及女を燼て
李祐を江に沈めぬるの。時の人憤し怒をぬ。誰か其好を訴る者あらん。
年を経て張島。馬伽民馬氏如民名を金淫橋に繫ぎて笞るが。馬怒て
我命一つ捨て萬人の怨を報ん。と云て張島が不法の事を書て。
京口に走往て直指官名陳憲が前に訟む。然て共二烈が事を遺せり。陳
表に拒て内に入れず。密に見るに。其に寔を得て。馬が陳る所と符
節を合せぬ。即有司に命じて島を縛め来らしめぬ。島曰。汝が髪
を擢共汝が罪の数に足りぬ。何ぞ一々白状せざると責む。時に張島を傍

ゝ促し責る者多ク如く。烈を害せるゝ或申ゝ。陳蕙駭て曰。天の汝ガ悪を顕せるゝとゝく。遂ゆ張島を法の如く行ふ。二烈ガ遺骨を求て葬らんとすれども得ず。周進貴已ゆ先疫を病て死せり。周洋一人網を漏て魚の如くゝり〳〵ガ。三年たゝて立て。又横ざまゝる事を行々まで。民周洋ガ舊悪を挙て。顔孟令顔と云ふゆ訴ふ。令曰。吾秀才〳〵時官を辱ず秀才ゆ如皐の二烈ガゝる或聞て。虐賊共ガ奸肉を食ひ。其皮ゆ寢んと欲しゝゆ想ハざるも餘黨ゆてゝ殲ずゝくみるゝと。立ざるゆ之を法ゆ行ひゝゝ。先ゆ御史ゝて或世廟ゆ天子の夏聞えゝゝで。有司ゆ詔〳〵て二烈の祠を立て。春秋ゆ少牢を以て祀り。牛羊豕を供祭を大牢と云ハ羊豕を供を少牢と云ハ王ひゝゝ。馮令汝弼ガ輓の詩ゆ曰 輓ハ棺を乗せし車をひく時朋友ゝて悲傷し詩を賦しゆ向ゝゝと云ハ身

遂魚腹綱常在節顕烏臺日月懸の句。今ゆ至ゝくも傳ゝく人誦ずと云ハ。

張烈婦

烈婦ハ荀氏ゝて。父の名ハ中益とゝ。考城地名の人ゝて。寧陵地名ゝ柳河地名の張鐸ゆ嫁せり。張鐸世ゝ農家ゆて。父亡し獨母のゝあり。烈婦裁縫を勤め。姑ゆ事ゝるの孝誼あり。其鄰ゆ韓可元と云者ゝて素ゝり無頼策黠の徒ゆしゝく。里中を横行せり。烈婦母の家ゝり帰ゝ来ゝくゝて。姑ゝ酒肉を沽上ゆ置て。盞ゝを覆ハざるゝく置ゆ。故を問ゝ姑ガ曰。麥煮ゝく熟しゝる時折ふし客のゝて来ゝ。汝ガ夫と呼て覆とさせんと思ふ事と。未帰来ざるし故其儘ゆくゝと云烈婦

衣飾を易ぎ遽かに門を出。蜀秫の桊を采る。麥を覆うんとす。畑に入る。此門外數百歩に即張鐸が田地なり。此時可元烈婦が秫叢に入るを窺うかがう。王壁と云者を呼よぶ。偖かに園中に入る。此王壁も同く無頼子かにて。年少にして貌好なるを見て。可元私に計るに。婦人王壁を見て必悦び隨べし。我其を言ばかにして対入らんに。他肖せざる理なしとて斯計らひしなり。烈婦王壁が秫叢に入来れるを駭き避く。汝何を為すと問に。王壁愈近く寄て抱んとす。烈婦声を発して人を救へと呼ぶ。王壁其口を押へて言へしめず。可元前ぐ抱て赫うして曰。從ずんば汝を殺さん。烈婦曰。願へくは殺せ。王壁曰。從ずば勤て死さん。烈婦曰。尸を全くせんを猶さら好。頂実を捨て死する人誓て汝に從へずと云ふ。強て

犯さんとする可元が頰を。ひとく擊て其裾を碎く。可元烈婦が衣を引折べ。のちに足を以て抵む。両人烈婦が髪を捽て仆せば仆れて復起て。再仆せば又起て。髪亂れて地に落るに至る。両人力を極て偪る共犯せるの衣得ず。衣に條々に烈ぬ。可元舎て去んとする。王壁後日の難あらんと云て。遂に縊死て頸の綱を樹に繫ぎて置る。烈婦死せんとする時。苦て足を地を抗るが。坎の如く跡つて血溜る。両人尚悪しき想て秫の本を陰戸に入深く打て首飾指環を奪て。急て逃往る。此時康熙巳巳二十七年五月九日なり。夫張鐸るに夢にも知らず。家に帰て姑に在て。婦の久く帰らざる不審て。張鐸が疾往て看んと云ふ。張鐸往て畑なる樹に繫て

死居なれば。大ゐ孩村人を呼ゐ集ゐ。皆集来ゐ悼め共其故を知者なし。張鐸為ぐ方無く指を買ゐ尸を収め。葬送を為んとす。初め可元林中より出る時。適張光彩と云者ゐ遇ひ。光彩も柳河の人なり。可元ぐ衣引裂き。血の付る所伝ゆく走り往さゐ。闘ゐ負し者ゐ似ず。光彩私ゐ怪む。韓十素より横道をもの。人ゐ譲るもの也。今日ハゐしく斯ゐく也。取し。と思ひ。可元兄弟ヨリゐく。輩行十人ゐ也。韓十と人呼ひ。光彩烈婦ぐ変を聞ぐ心ゐ可元ぐ所為なるゐ知り。私ゐ其妻ゐ語り。なれば。妻唾吐しゐく曰。韓十ハ悪人なり。天命盡ぐ自斃ん。汝韓十を畏れゐ言ハぐ。死せる者知るものゐ必偽鬼と為ゐ汝ゐ禍せん。と云ゐ。光彩恨ん。自往んと。光彩恨ん。且慚ゐ直ゐ走り

張鐸ぐ家ゐ往ゐ。ゐ語り。願ハくハ証人と為ん。と云ふ。張鐸此ゐ於ゐ可元を官ゐ訟ふ。可元吏ゐ賄しゐく其獄を緩くす。六月二十二日ゐ至ゐ始ゐ往ゐ尸を験む。烈婦死しゐく匝月ゐ経ぬ。然るゐ棺を啟ゐく視るゐ面生るぐ如く。肢体血斑鮮ゐ見へ。ゐ死後掖ぐ僵ぐ立て。衆皆驚異む。仵人盡其傷を隠しゐく云。頸の縄の痕交せぐ。孟人の勒死せるハ縄痕交せ。今交せざるハ自縊しゐ違ぐ。と申す。今其言ゐ惑ひ張鐸ぐ誣ちゐん。と云ふ。観者大ゐ譁く言ふ。今ゐ動きゐく衆を散ぜしめゐく曰。明日更ゐ此を鞫さん。と。其日ハ府ゐ帰り。翌日聚り観る者益ヨリゐく。役所の前ゐ充満す。乃城隍廟ゐ於ゐく鞫を。仵人申を夏昨日の如し。江戸夫ゐ張九容と云者あり。前ゐ仵人を叱ゐく曰。韓十私ゐ我

可元王壁等
林叢ゝ張烈
婦を縊死し
て柳河村伐
鬪を

曹の金を遺まり。汝若干を得と斯諱く真を云ふと云ふ。此の可元始の賄を與る時。張九容獨受ぎり。故の然いるなり。件人此時返ぎ語あり。令已事を得ぎ薄此を責む。衆憤しく件人を捽へ群りて毆く斃さんとす。可元既の鬼神の奪ひ。又衆人の怒る声を聞く。免まぎこと知く。其の烈婦を殺せる状を述べく曰。秋を伸こうの従へぎる式憤くちる。首飾指環を掠つる。本意を遂ぎ貨を取く胸を晴まそと申せば。隷の仰せく可元が家を索めむる。果して首飾指環具の在りぎ乃可元王璧を収く獄の下し。死罪の定ぎ。幾むくちるぎ二人なり。相継ぎ獄中の死く。斃失り。此邑の烈婦祠あり。黄喬の二婦（黄氏と喬氏の二婦也）を祀まる。此張氏黄喬の劣る歟ぎ。と人毎の嘆賞せざる者無ぎ。

陳氏
鄭氏

康熙二十五年。閩国名の唐嶼鎮地名なる。書生林国奎が妻鄭氏の夫死しく後節を守りく。夫の弟の文芳と云者あり。言の出しく挑ぎ。鄭氏怒く左の耳を割く宗老の告ぎ。此を笞ぎ。其後又讒言を書く其子の書箱麗の中の投入ぎ。鄭氏大の怒く又右の耳を割り。鄭氏が父煥と云者官の出く訟ぎ。下中丞宮永答。親轅門（軍門と云ふ如し陣中の車の名）置く門。ゆく鞫し王の観る者数千人あり。文芳を重く杖柳を加へく。ぎ。観る者感服しく快とせり。時夏ゆく日干瀆ぎ。此日大の雨降出ぬ。俄の鄭氏が雙耳復

生じ〻く初の如し。蓋天奇節を顕し玉ふる歟し。古今例無事と云爲。

徽賈妻妾

甲申三月。闖賊（闖賊を起る賊敵なり）起て京城を破る時。徽賈緞肆（徽州の人）の妻と妾と共に謀て霜酒を飲て死なんと云ふ時。二賊入来けるに夫は天井の上に躲れり。賊二人の女を際に抱て楽む妻毒酒を大碗に斟て自飲む賊〻咲て。盍我と共に醉ざるべしと云ふ。妻答へず。妾意を解て二の碗に酒をなみなみと盛て賊に進め琵琶を取て弾々佰々る。二賊飲て倒れて死す。妻も亦倒る。夫急下て来て。羊を殺し血を取て妻の口に灌ぐ。先に傾るが故に酒毒尚軽く〻て活ることを。扨二賊の尸を捲て後の河に沈め門を閉て静に避去る。竟に危き難を免れる。

林氏

濟南地名に戚安期と云人。素より色好みて浮き歩行る。妻始て折をえて。かたみに諫めども聴ざりける。妻は林氏なり。貌美麗にして賢なり。明末の時北兵北狄の起る境に入来て。林氏を停めて暮て途中に宿して此を犯さんとす。林氏偽て諾して。兵の佩刀の床頭に在しを取て急に刀を抽て自刎して死す。兵林氏が尸を野に捨つ。次日戚安期が妻林氏が死せるを告る者あり。戚いたく悼て往て尸を見るに微〻息あり。背に負て帰て。漸〻に抱し介抱して。

目瞬動き。且聲を出して呻ぬ。其項を扶て竹の管を。湯藥或
の飲ませ養ひて。汝萬一能命活ちぬべ。吾此後好色を作さじ。若負ぬ
必凶ぬ遭ハん。と誓ひ。半年を過して。林氏平復して。故の如くよ
成ぬ。咸安期愛戀とるる昔ぬ愈まり。曲巷の遊此ぬ絶て休を
ぬ。數年立て林氏子無ぬ依て夫ぬ勧て。婢を妾ぬ納て王へ。と
云へば咸ぬ曰誓前ぬ在り。鬼神豈聞ぬ子孫の斷ぬ命ぬ。
汝老る身ぬ非ず。行末子みぬも計るべ。と云て承引ず。
林氏身の疾ぬ托て。夫を別の室ぬ臥さしめ。婢の海棠と云者ぬ教
て。夫の床下ぬ臥しむ。既ぬ久くして陰ぬ婢ぬ語て。夫の汝ぬ所ぬ來て
寢玉ひしやと問へば。婢然るの事と答ふ。林氏信とせずして夜。婢を

彼處ぬ遣らず。自性て夫の床ぬ登りて夫目醒て誰ぞと問ぬ林
氏耳ぬ口を寄て。我ハ海棠なりと云へば。咸ぬ曰我妻と誓ひ支有て
敢て更ず。若昔の心なるべ。汝ぬ斯來ぬ待ぬ。と云て拒て容ず。
林氏聞て怒て我室ぬ入て臥ぬ。此ぬ咸孤眠をぞして。林氏又婢
ぬ云含めて。自の姿となりて夫ぬ床ぬ就しむ。咸念へらく。我妻平生
自進て。被中ぬ入ること無し。と疑ひて其項を摸ぬ痕なし。是
婢なりと知て床を出しなば。婢ハ慚て退れり。夜明て林氏ぬ語て。
速ぬ婢を外へ嫁せ。と云へば林氏咲て曰。君余ぬ公強し。倘男子を
儲ぬ幸甚ぬ。咸ぬ曰盟誓ぬ背ぬ鬼神の責身ぬ及ん。
爭宗嗣を續くるのみならん。と云て聽ず。翌日林氏笑て夫ぬ語て曰。

凡農家ゆくへ種を播き収常例あり。違へべからず。今夜耕耨の期に至りぬと云へば咸笑て其意を解せず。既に日暮て林氏燭を滅し婢を呼て已に食の中に臥さしむ。咸へ知らずして榻に登て戯れて曰。個人至れり。我銭鏄の利を図ると。此良田に貿くを愧。婢つゝて物言はずして居り。事已て婢偽て溺に起往て。林氏をいて易ら婢に以後へ婢が経行の終る度事に斯の如くして。夫へ知らずして。婢が腹大きに成ぬ。林氏常に静かに坐せしめ。ゆゑ業をさせず。ゆゑに夫に語て云へ。婢を室に入れん事を勧つゝ共。君聴て王へざりき。若君悟て我ありと云へ。婢と寝て王ひて婢孕へべ。彼をいるに咸が曰。子を留て母を

云へ。林氏聞て答て曰。月を経て婢一子を産り。林氏暗に乳媼を求て。母の家に預て養しむ。四五年を経て又一子一女を生む。長子名は長生巳に七歳なる後。外祖家に預て養せり。林氏年月を過しぬ。帰寧に托して往て遇へ。婢年々長ず。咸時に此を外に嫁せんと促す。林氏諾て。婢日に児女を思て逢へんと欲す。林氏其願に従ひ髪を上げて此を母の家に送り。諸らに咸に向て云。海棠が嫁せん事を欲せざるべし。母の家に義男有り。此度此に配て成せんと云へ。年此を過して子女倶に成長せり。咸初度に値へ。林氏期に先ぶ。酒食の用意して。賓友に誰にか問へ。咸嘆じて曰。歳月早過て忽半世五十に成ぬ。幸に各強健にして。家事も凍餒に至らず。願所の者へ

膝下一點のそと云へ林氏曰君孰拗しく妾が言に従へぬ。今誰を怨む。然るに共男子両人を得んと欲するも。難えるに非ず。何ぞ況一人をや。戚笑て曰。既に難くるぞと云。然らば明日両の男子を索め林氏易き事と云。翌日早く起て。駕を命じて母の家に至る。子女を抱せ載て俱に帰り来る。門に入て雁行せむ。子等父を賀して千秋と呼び。拜して嬉笑す。戚駭き怪て解せず。林氏曰。君両男を索む妾一女を添へと云て。始て詳に本末を述ぶ。戚喜て曰。何ぞ早く告ざるや。林氏曰早く告ば君其母を絶ん。今子已に成立せり。尚絶てべんや。戚感極て。涙自流るぬ。乃婢を迎て老を偕にしてと。林氏が如き者は聖と云べし。

金三妻

崑山地名の舟師に楊姓なる者あり。金姓なる者と睦ひ〻〻。金死て一人の男子を遺せり。名を三と云ふ。年十七にして家事甚〻多し。年十七にして家事甚〻多し。けれども楊は貧窶にして我舟に入れて養ふ。三も力を出して勤めて大に愛し〻〻。楊夫婦子無し。只若き女一人を持て。因て三を妻とす。歳を越て三疾に深く侵す。漸く羸瘠して危に至る。楊夫婦始て悔て罵辱すれども止ず。一日江に舟を出し孤嶼の下に泊す。三に命じて島に下て薪を拾はせ。帰らざる間に帆を挂て去り去る。三薪を采て岸に来て見れば舟なし。痛哭して江に赴て死んとせしが。又念ひ返して此島の中若入あらば。冀て救ひ求むべしと。

足に任せて行くに林あり。入て一所に至るに大なる篋七八あり。何の故に斯る物を深林に入置るるぞ。恐らくは盜の刼せし所の財にして。暫此地に藏るるべしと思て。又工賓より出て臨むに。舟其處を過るあり。二人其舟に招て曰。我に行李あり。伴を待共至られ。我を舟に乘せて去れと云へば。舟中の者許して諾す。二人篋を舟に入れ。行て儀真地名に抵て。人の家に宿して篋を啟て視れば。皆金珠なり。其地に即て若干を售り。此より服食起居故に非ず。僮僕を收へて妾を買て。富家の主となれり。一日舟に乘て河を過るに。楊が舟に在て。二人の人識を共楊に知らざる。二人を遣て其舟を雇へしめて。湖襄地名の賈輜重ヨリて在りと云へり。是より先楊。二人を棄て時。女晝夜啼

哭して生きんを欲せず。父母是に強て。更に婚を納れんと云へば。女答へず。今日二人舟に登て来るに見て。入皆伏して仰ぎ見る者なし。女竊に視て驚て母に語て曰。客の狀吾婚に似たり。母と共に詳て。二人を知きに死せる所を知らざると云へば。女再言はず。二人を顧て伴て舟入に渉て日。何ぞ船尾なる破鉆を取て載るべしと云へば。是に二人が事時。初て楊が舟に登る時。楊が斯言しるり。是に於て妻も初て覺て。相見て。二人驩ぶるの平生の如し。楊夫婦羅拜して罪を請ひ過を悔て止まず。其後男姑女を娶て。家に携帰て養へり。其後劉寂劉六劉七と云者。叛て呉に入るに。二人金帛を出して戰士を募て求め。郡の別駕官名胡公胡氏の諸侯に從て。直に狼山の穴を搗き。其渠魁を

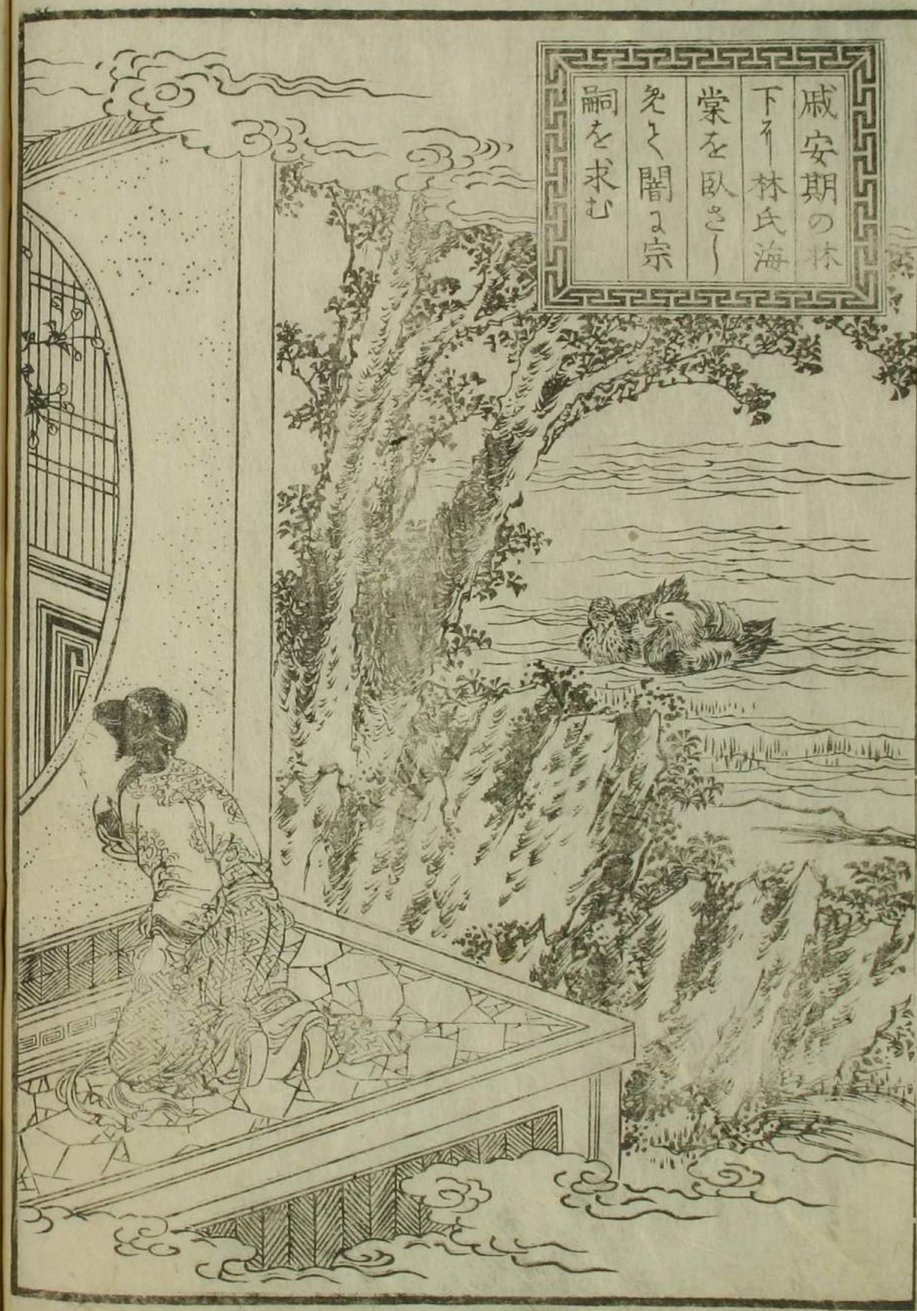
縛して討ちてあまを平げぬ。此功を以て武騎尉官名と成。妻も同く封爵を受る。

汪来姐

汪夢柏は貴池地名の人なり。崇禎年中蜀の長壽縣縣の名の丞下司より しゅう。賊を禦ぎて死失ぬ。其妻も亦死しぬ。僅に一人の幼女来姐と。僕の余生夫婦を遺せり。其ころ大學生周維魯が家を借て住 ぼくの。父の汪夢柏が娘の子に呉雲と云者あり。此呉雲来姐を妻よせんと欲す。来姐叱て曰我は汝が姨母なり。何ぞ斯る無禮を作せ。と云て。呉雲慙て且恚りて私に周維魯を訴しく。側室とせんと謀りて其父の客とせし。徐鏡水と云者。兵部知りて急に来姐に告げ。是て先来姐。強暴の中已に青陽地名の老田呉氏が聘状受る。皆の名は国璋とぞ云る。来姐死を誓て髪を剪り徐鏡水に渡して。此を持て縣に訴る。呉雲と周維魯とは皆罪を獲る。茲に長壽縣の舊典史に某と云者あり。饒州国名の人なり。夢柏と僚友なりしが其義に感じて。来姐を家に迎へて已が女とす。饒州に帰僕の余生に命じ。國璋を青陽地名より迎へて。来姐と婚を為さしめ。久く有て共に池州国名に帰る。此一事夢柏が忠烈。来姐が節操。典史何某が幕客。徐鏡水が義。之の美具はれり。皆書記して後世に遺すに足れり。

秀水賊犯女

嘉興地名の張天成と云者は秀水縣縣名の使者なり。三考の雜職なり。蠹を積て家を起し。權を恣にして鄉里の人を害ふ故に里人目を側て恐れとなり。康熙三十年犯の獄に入るあり。天成刑書にて捕役の者賊の婦を拘へ引來ぬ。天成盜が婦の美なる我れて力て之を釋さんとす。盜をもさのみ刑を用ずして獄に入置つ。扨私に盜が婦と通姦す。日久しく此を娶んと欲す。獄卒に銀我與へて夫の盜を獄中に斃さしむ。扨婦を取て妾とす。盜が婦女を生む。年十三に成ぬ。天成も妻を喪て子無し。螟蛉の子方姓なる者を子とす。居ること其女と計て妻とす。此女年長ずるに迫て美なること天成又これを姦せんと欲す。方姓家に在る我障なりとて逐出す。遺ていく。時に女を挑む。盜が婦これを覺てこれを防ぐ。天成日毎に其婦を撻く。或は飢し寒し。或は狼藉の限を成す。依て數月なるに堪ずして死ぬ。康熙丁丑三十六年九月のころ。女年十九なり。天成晝夜付纏て誘へ。女さるべくと拒て今は計盡て逃るべき方なし。八日の日女天成に謂て曰我父母俱に亡ひ方姓已に逐出す。王へ我身何ぞ所もあれ。父に屬を託べし。明日は重陽の嘉節なり。醉て盡して枕に就べし。河なるべんと云へり。天成大に喜び。翌日菊鶴を具へ父女共に飲て夜に至れり。女父を誘て先に寢に就しむ。父屢早く寢ると呼ぶ。女燭を明て牀に登り。差て側に居る。父忍び


戚安期の林下に林氏海棠を臥さしめ
名く閣に宗嗣を求む

難くありて再三促しくれども女ゲ曰。我ハ處子なり。未敬事を免れざる。先其物を我が口へ入せ王へと云へば父喜ぶ事甚く。被衣を除くに口。女父の首を被を覆て。兼て用意せし剃刀を取出し。左の手の勢を執へ右手に剃刀を執て割下へ。天成起上りて女の喉を締めるべし息絶て仆れぬ。天成割らるし虐血流出て斃れけるを。是も曾軍て地に仆れぬ女復甦て勢と剃刀を持て。鄰佑を減くるべし。即女を引て秀水縣府に至れり。縣令陳綽と云人委驗あり。郡公に告く。郡公大に莫賞して。立ぞろへ方姓の子を呼て。堂上に於て姻を成さむ。天成創深重して。痛苦せるの三日。堪忍ずして毒を服して死かり。縣令親往て驗王ひ張氏ゲ家財の半を以て方姓夫婦に給ひ半を以て天成ゲ母に給ハりて。本府當役の黄郡尊人其事を旌し記して給へり。合郡傳て以て奇節とせり。是全く天成ゲ積悪の上に血夫婦を殺せ〜報ずると人云へり。

劉盼春

劉盼春ハ汴梁地名の樂工。劉鳴高ゲ女なり。年十八ゆて汴人周恭と忍びて逢へり。周恭ゲ父嚴に禁めて絶て半年なりしを逢へり。盼春門を杜て獨ゐ居へり。雲間地名の富商金帛を母に贈て女を迎へんとす。母女の志を奪て是に與へんとすれども。女固くいなむ。應へざるべ。母怒て笞楚て止ず。周恭此事を聞て書を遣て。

母の命に従へば忠義云へり。盼春笑て曰。妾豈常人の比なん。既に身を君に季ねる。何ぞ他に適の理あらんと答へぬ。数月ありて復富商の方へ遣らんと責る。是も女竟に鐶に縊て死ぬる。其尸を火時。餘燼悉焚人る。佩る所の香囊焚ざりしく本のまゝあり。取て發れば中に周恭が詞簡一枚入たりあり。衆人驚きあやしみる。宣徳四年のことなり。

高三

高三は京師の妓女なり。姿美なり。昌平侯楊俊此高三が初て客を迎る時に押て。ひそかに外人の手を経ず。昌平別を去て。北邊の備とありて數歳を経る。高三門を閉て客に逢ぬ。天順年中昌平と。

范都督官名貴と石亨が讒言に逢ふ。其故は天子親北虜を征し給ふとて。軍を出し玉へる時土木と云處に至る。戰利あらずして天子北虜に囚はれ給ひ。斯る大變の時昌平坐視して救ざりしは不忠なりとて。二人市に引出さる。親戚又は故吏の輩一人も往者なし。彼は一婦人なり。白衣を着て入来ぬ見れば高三なり。昌平顧て曰。汝来て何をか為ると云へば。公の死に事へんとて云て大に呼て曰。天なる哉忠良の人今死する事と云へ。観る者駭ざるは無し。昌平是を止めて曰。已孤我に益なし。汝を累せんと云へば高三曰。我已に衆に行はんと辨て在り。公竟往け。妾隨て至らんと云ふ。楊既に喪なれば高三慟哭して其頸の血を吮て。鍼線を以て頸を縫著け。昌平が家人を顧て。云

く是を葬まと云く。即自縑を取て旁に経く失ぬ。娼婦も斯る女も有なり。

許氏鶴

許氏が園に二の鶴あり。其雄斃く後歳餘あり。客外に二の鶴を贈る者あり。孤鶴鵠々と〻く之を避く飲啄を同くせず。雄鶴ハ其匹の林間の間に入るひ千戎幸と此つゞひたるを心を掛く対やとゝ吮を延く張鳴〻く相搏ふ。雄ゑまゞかゝく静やらぬ雙鶴池に在まゞ孤の鶴ハ庭に在り。雙鶴の庭に在時も亦然り。毎に月明に風和ある時ハ。雙鶴翩々と舞くあちらこく鳴かハせり。孤鶴ハ寂たる處に在く應へず。或ハ風雨晦冥にして寒端石に瀉ぎ。霜葉柯を辞する時ハ哀

声弦巻く。獨啼事清角に類せり。聞く者悲まざる者無し。主人其羽翮を長せ〻めく。遠く放てゞ遣る。抑他〻公をのくる人の妻あるハ別まし〻悲さとも。程過まゞ忘まを果く。又更に新枕をゝをるゝど。此鶴に恥ざらめや。

鷄

白鷄呉江地より来まる。魏干敬が家に畜へり。最よく鬪ふ。數其同類を攻敗まゞ。聲を聞くもあるの鷄共あとぐく逃ゑる。其雌ハ雄と共に来まる者ちの。一飲一啄必相偕ふまと。亦時く雄の勢を藉く他の鷄を侮まり。一日田家より一鷄を詣まり。黒鬣絳身なり。是を群る中に内まし〻に暮に至く白鷄の在所を失へり。時を移し〻く白鷄血に

毛羽を保て来ぬ。彼黒き髯ある者と闘るるとて名乗。初角ふ時各
聲を枚を銜む軍の如く又人の分け隔てん事を恐るるふ似て。為に
挑あひて因て遂ふ至れり。白鶏遂ふ明を失ぬ老嫗の来て分て他
所ふ移し雌雄を率へて来て雄の目を失し或は狂呼て止む
轉じて鶏群ふ奔入て熟睨て黒髯ある者の双のむなぶふ血のつ
たる或見て翅を奮ひ相搏て数百歩を逐ふ往ぬる者壮なる
とも然も共雄も此より僵遂ふ食へず徙倚て死ふ。雄
も續て死失ぬ主人憐て之を圃中ふ瘞めぬ是より黒髯ある者
鶏群ふ霸て主人其塚ふ銘して曰
生乎雄死乎恫取而瘞之同其宮楚子之葬馬與六

子之埋狗也是寧從其隆

尾定

奇説排門録巻之三了